

## はしがき

まず、本書のテーマと構成を簡単に述べ、読み方の示唆を行なっておきたい。本書は、形而上学に属するいくつかのトピックを、五つの章で論じたものである。最も大きく分けるなら、第一章と第二章と第五章のテーマが「存在」であり、第三章と第四章のテーマが「性質」である。もうすこし細別すれば、第一章は「存在」と「非存在」の問題について概観する章であり、参考書的な記述も含んでいる。同様に第三章は「性質」をめぐる諸問題について概観する章であり、やはり参考書的な記述を含んでいる。対照的に、残りの章は、より個別的なトピックを扱った章である。第二章は「穴」について、第四章は「価値」について、第五章は「フィクション」について論じている。第二章と第四章は、導入的な説明を前半に含むが、章全体としては第一章や第三章で導入した枠組みが具体的な問題にどのように適用できるかを見てもらうことに重きが置かれている。第五章はやや異質であり、フィクションや架空物をめ

ぐる問題領域が、大方の予想に反して、形而上学が扱うべきトピックを大きく越え出るのではないかということを示唆するものである。すなわち、問題が形而上学者の手を離れていく境界線を示すための章になっている。

「穴」、「価値」、「フィクション」を取りあげることにについてここでさらに補足説明をしておこう。誰もが哲学的な感覚をすこし働かせれば、それらが問題含みのテーマであることに気づくはずだ。穴は、どこそこにあったり、ありすぎて穴だらけだと言われたりするような何かである。だが他方で、あるべき何かの欠如こそが穴の本質だとも言える。穴は存在と非存在のはざまに揺蕩っているように見える。価値は、あくまでそれを享受する者にとつての価値であり、人間の存在に依存している。しかし他方で価値は、物に備わっており、われわれがそれに気づかなかつたりそれを発見したりするものである。価値は主観と客観の両方に、いずれとも言いきれない仕方でもたがっているように見える。フィクションは架空の何かに関わっている。架空物は存在しない。ところがフィクションはまさに、存在しないはずのその何かについてさまざまなことを語ったものであるように見える。以上のようなテーマをめぐって、矛盾した、両義的な語りを重ねることで、独特の雰囲気を出すのもおそらく一興ではあるう。ひよっとしたら「哲学」にそのようなイメージを抱かれているかもしれない。だが私自身は、そうした言語的カーニバルからは距離を置き、平日に事務作業をするような仕方で事柄を整理していくことのほうを好む。本書では穴や価値やフィクションやその他のテーマについて、できるだけ整合的で見やすい地図を描くことをめざしたい。

そもそも「形而上学」とは何かが分からないと言われるかもしれない。それについてはまず第一章で、あるいは本書の全体を通して、示されることになるかと期待している。ただ一点、本書が形而上学の問題に対して、いわゆる分析哲学のアプローチをとっていることを断っておくのがよいだろう。二十一世紀に入り十数年が経過したいま、形而上学と分析哲学の相性が悪いと思っている人はまさかいないと思うが、念のために述べると、分析哲学が形而上学を排斥していたというのは都市伝説である。または不幸なプロパガンダである。(これについて私は七年ほど前に日本哲学会の学会誌に論文を書いたことがある。)歴史的な経緯はさておき、今日「分析哲学」は、家族的に類似した雑多な道具立ての集合体のための名称すぎない。何かと闘う党派の名前ではない。

というわけで、本書は普通の、開かれた哲学書である。それぞれの問いについてすでに自分自身で考え抜いたことのある者のみが読むことを許された秘教書ではない。哲学に興味のある人が適切な速度で読むならばきつと理解可能である。ただし、ゼロからの入門書というわけではないので、予備知識があったほうが楽しく読めると言えるような箇所はたしかにある。本書において説明が省かれている部分については、対応する良い参考文献が他にあるはずなので、必要に応じてそれらにあたってほしい。それらへの示唆はできるかぎり行なったつもりである。

読み方としては第一章から順に読んでいくのがもちろん無難である。とはいえ、第一段落に示したように、各章のテーマは比較的独立しているので、読者の関心に従っていくつかの章を先に読むこともできなくはない。そのために必要な内部参照もできるかぎり提示したつもりである。ただし第二章は、第

一章をまず読んでから読むほうがおそらく理解しやすいし、第四章も、まず第三章を読んでからのほうが理解しやすいと思う。

## 第一章 何が存在するのかという問い

### 1 存在論から始まる問い

形而上学とは一つの重要な意味において存在論のことである。それゆえ存在論の話から本書を始めようと思う。異論はあるだろう。存在論的でない「形而上学」や形而上学的でない「存在論」があつていはずだ。いずれの語もその一致に抗えるだけの豊かな内包をもっている。しかし、今日日本語で書かれたおそらく最も分かりやすい形而上学の——私の考えるまさに「形而上学」の——入門書の書き出しにある一文は次のようなものである。すなわち、「誤解を恐れずに単純化して言えば、形而上学が研究対象とするのは、この世界の基礎的なあり方である」。さらにそれは「ここで言う世界とは、地球上に

存在する事物だけでなく、おおよそ存在するあらゆるものを含む全体のことである」と続く<sup>(1)</sup>。この特徴づけに基本的に私も賛成したい。

世界は存在する事物から構成されている。いかにも。そしてそれは次のように表現してもよいだろう。世界は存在者であふれていると。「存在者」という言い方は大げさに響くかもしれないが、私はその語を、存在するあらゆるものを一般に表す言葉として使う。

話が抽象的なので、どういうことなのか身近なところから確認したいと思う。自分の部屋に入っていくとする。部屋の中は物であふれている（とくに私の部屋は散らかっている）。机の上を見てほしい。机も一つの物体であるが、その上にはさまざまな物が乗っている。何枚もの紙、封筒、本、ペン、クリップ、輪ゴム、あるいは無数の埃、なぜか干涸びたミカンの皮の破片までがある。それらはすべてこの部屋の中に在る。もちろん私自身も、この部屋にいま存在する物の一つである。「人物」と言うくらいだから、この文脈で人を物の仲間に数えあげることには何の問題もない。いずれにしても「存在するもの」と言われて最初に思い浮かぶのは、こうした中間サイズの日常的な物体たちであろう。

この部屋にほかに存在者はいないだろうか。まず、もっと小さな、目に見えない物が在る。空気を構成する個々の分子などがそれである。ただし、空気の存在を微粒子の存在として語るにはちょっとした科学の知識が必要であるから、この答えはすでに身近でも素朴でもない。実際、このあたりから問いと答えが素朴でなくなってくる。たとえば、存在するあらゆるものを世界が「含む」のだとして、そのための容れ物は必要ないのだろうか。われわれは無数の事物を識別している。識別は、一つには、ここに

これが在り、あそこ、にあれが在るといふ仕方で行なつてゐるやうに思われる。すなわち、容れ物にあたる何かに相対的にさまざまな事物が位置づけられてゐるやうに見える。あるいは、識別は性質の違いによつてなされてゐると思われるかもしれない。これは黒いが、あれは黒くないといったぐあいである。だとすれば、性質なるものがこの世界の構成要素として必要にならないのだろうか。私の机は黒い。汚れて黒いわけではなく、材質由来のきれいな黒である。典型的な黒さがここにある。目の前には、机のほか、黒さというものが在るといふことだろうか。たしかにわれわれの言語には「黒い」といふ形容詞だけでなく「黒さ」といふ名詞が用意されている。それを文字通りに受けとつてよいのか。ややこしく考えはじめるといろいろな疑問が生じてくる。ほかにもたとえば、物体が世界の直接的な構成要素なのかどうかについて問うことができよう。つまりむしろ、事態や命題または出来事といったものが世界を直接構成してゐるのだと考へたくなるかもしれない。

結局のところ、以上は、世界のあり方について最も一般的かつ体系的な記述を与えるといふ課題へとつながる疑問だと言ふことができる。もちろんそのさい形式的な共通性や整合性に目をやることも重要だから、それは、広い意味での論理学の課題であるとも言える。

部屋の外に出よう。形而上学の対象が「地球上に存在する事物だけでない」とはどういう意味だろうか。地球上に存在しないといつても、その筆頭にあげるべき事物は、ブラックホールや一二六番元素ではない。形而上学者たちが第一に気にするのは、たとえばこの世界に対する数の2の位置づけなどである。数学的对象としての2は、もし存在するとしても、地球上にあつたり地球外にあつたりはしないの

ではないか。2が在るのはむしろ1と3の間であろう。にもかかわらず2は、もし存在するならば、この世界の構成に関与していると言いたくなる。とすれば、数はいったいどのような仕方であるか。世界のあり方に  
関わりうるのだろうか。

あるいは、現在のフランス国王やシャーロック・ホームズを、形而上学者たちは話題にするかもしれない。それらが研究の「対象」かどうかを問題にするはずだ。現フランス国王やホームズはむしろ、たかだか存在しうるにすぎないか、存在するかのよう、語られるにすぎないと第一には思われる。すなわちそれらは重要な意味において存在しないのである。しかしそれらもまた、あるいはそうしたものがこそ、形而上学者たちの関心の的であることは、冒頭に引いた件の入門書の後続の記述が鮮明に示している。形而上学における存在論的問いは非存在についての問いを含むのである。存在しないものがなぜ重要かという、形而上学にあつては「存在」の意味そのものが問題となるからである。

形而上学の問題は哲学の問題にはかならない。存在と非存在の境界が、あるいは、語られることと存在することとのあいだの関係が、重要なのだ。一般的なカテゴリーとして何が存在し、何が存在しないかは、まちがいにこの世界の基礎的なあり方をめぐる問いの中心を構成する。そのさいに形而上学者は、それ自身疑われることのない特定の操作的基準に従つて、狙つた存在者を発見しようと努力するわけではない。そのような努力はもちろん人類がこれまでしてきたし、これからもしつづけるであろう有益な試みではある。だがそれはどちらかといえば別の分野の方法論の話である。そもそも、シャーロック・ホームズを見つけるためにわれわれはどのような手続きを踏めばよいのか。<sup>(3)</sup>対比的に述べるな



ら、哲学の課題は、何がどのよ、うな意味で存在し、何がどのよ、うな意味で存在しないかを、できるかぎり明瞭に語ることである。そして、それもまた人類が昔からやってきたことである。

第一章ではそうした営みのうち、比較的現代に近いところから始まる流れの一つを中心に見ていこうと思う。そして章の後半では、そうした流れをより大きな構図のもとで描いてみたいと思う。

## 2 不在者のリスト

存在についての形而上学的な問いは非存在についての問いを含む。そしてそれは哲学者にとって重要な問いの側面を形成する。そこで、この第2節では、あえて非存在をめぐる議論の側から問題圏へと入ることにしたい。とはいえ、すぐに感じられると思うが、何が無いのかという問いの形にはどこかわれわれを当惑させるところがある。

「何が無いのか」という問いに存在論的に答えることは実際むずかしい。眉間に皺をよせて「無」と答えるならば、それはもはや悪い意味での禪問答である。無が無い。だからどうしたと言うのだ。もちろん常識的にこの問いの意味するところは明瞭である。日常会話においてその問いは「あと何が足りないのか」とほぼ同義である。つまりそこでは、その場にないけれどもどこかにはあるはずの物の名前をあげることが要求されている。その場合、無いものとは「欠席者」に等しい。欠席者は肝心なときに別の場所にいる存在者である。だが、考えられるかぎりの全体から、欠席者とすることは可能だろうか。もし

定義上「宇宙」が外部をもたないのであれば、宇宙を留守にしてどこかへ行くことは不可能だと思われる。宇宙の全体の中に無いものはほんとうに無いのである<sup>4</sup>。

ところが、哲学者は、これまでさまざまな種類の非存在について語ってきた。その系譜のすべてを見渡すことはできないので、以下では、リストの形でそのごく一部をあげるにとどめたい。すなわち、哲学者たちによって存在が否定されたり疑問視されたりしたことのあるいくつかのカテゴリーのリストである。

- a. 矛盾物 (バークレーカレッジの四角い円屋根)
- b. 架空物 (ユニコーン、シャーロック・ホームズ)
- c. 単に可能的なもの (現在のフランス国王、全長2メートルのトンボ)
- d. 理想物 (完全に摩擦の無い平面、無限の演算能力をもつ信念主体)
- e. 死者 (ソクラテス、私の祖母)
- f. 普遍者 (黒さ、謙虚さ、猫性)
- g. 抽象者 (2、数、クラス)

いずれも、前節の例で言えば、部屋の中で最初に見つけることがなさそうな曲者ぞろいである。リストの各項目にはそれぞれ議論の文脈がある。すべてがいつもいっしょに論じられるわけではもちろんな

い。さまざまな用途をもつ商品が並べられたスーパーマーケットの陳列棚を想像していただきたい。そこには雑多な種類のもが並べられているが、並べ方には多かれ少なかれ店側の意図が反映される。私は、おおむねリストを下るほどにその擁護者——つまりそれを世界の真の構成要素と見なす人々——が増えていくような順で並べたつもりである。リスト筆頭のaは「非存在者」の代表格である。矛盾物の存在を否定せずに他の何かの存在を否定することは困難だろう。逆にgの抽象者は、人によつては、それなしですませることが無謀にすら思えるかもしれない。抽象的な対象にいつさい言及することなくたとえばどうやって数学の命題を語ればよいのか。

リストの並びは歴史的順序を無視している。古くからおなじみなのはfの普遍者であろう。「普遍者」は日常会話ではおなじみでないが、伝統的に、存在者の一種と捉えられた性質を意味する。個別的な机が黒いのは、黒さと呼ぶべき一般的なものが在り、それがそこに現われているからだと考へるならば、黒さはまさに普遍者の一種である。普遍者が、存在を否定されないまでも「第二実体」という残念な地位を与えられたのは、紀元前の話である。<sup>5)</sup> リストのすぐ前のeはそれと対照的だ。死者たちがスーパーマーケットに侵入してきたのはつい最近のことである。たしかに別の議論の文脈で死者の不在が前提とされることは古代からあった。「死が訪れたときわれわれはもはや存在しない」というのは、死がわれわれと無関係であることを導くための有名な論証の前提の一つであった。<sup>6)</sup> だが、その前提を認めつつ、死者の名前を口にしつづけることが、「シャーロック・ホームズ」の名前を口にする場合と類比的な問題を生じさせるといふ観点は、私の知るかぎり、斬新なものであり、それが明示的に定式化されるには近年の論者の登場を待

つ必要があつたと思つ(7)。

リストは包括的ではない。ほかにたとえば、個々の議論の文脈で、物体の切り離されていない眞部分、諸部分から成る全体、任意の諸部分から成る全体、具体的な出来事、状態、過程、曖昧な対象、世界の全体、あるいは、穴、影、虹、境界といったものが、その存在自体を議論の対象にされてきた。(8)

リストは相互排他的でもない。一例をあげれば、単に可能な普遍者はcとfの両方の項に該当する。そして、そのような単に可能的な(つまり異世界的な<sup>エイリアン</sup>)普遍者の存在を認める哲学者がいる一方で、現実に例化されている普遍者(およびそれらの合成による普遍者)の存在しか認めない哲学者もいる。(9)

各項目は下位分類が可能であり、下位のそれぞれについて理論的に異なつた扱いがなされる。たとえば架空物でも、固有名によって名指されているように見えるものと一般名によって表現されているように見えるものとの区別や、作者がいるものとそうでないものとの区別などがとうぜんありうる。また、見知りのあつた死者とそうでない死者とでは理論的な扱いに差が設けられるかもしれない。

注釈が長くなつてしまつた。私が強調したいのは以下の二点である。まず、(1)すでに指摘したように、この短いリストでさえ非常に雑多な種類のものを含んでいて、それぞれに固有の議論の文脈がある。そして、(2)それにもかかわらず、今日では、ほとんどいづれにも共通するあるルールに則つて、議論の決着が付けられようとしている、または、すくなくとも見解の優劣が判断されているように見える。この第二の点については——そしてその背景にある二十世紀以降非常に一般的になつた手法については——後続の節で説明したいと思つ。

## あとがき

このところつづけて「入門」を題名に含む本を書いている気がする。まえがきやあとがきで自著がいかに入門書であるかを説明するために頭をひねるのもある種の恒例行事になっている。ただし今回は、その縛りが与えられることによつて、逆にはじめから自由を手にすることができたように思う。「はしがき」で述べたように、この本は比較的独立したいくつかのテーマの議論から構成されている。それらのテーマは、今日なら「形而上学的」と呼ばれるであろう側面をもつという点のみ、一つに括られる。もしも、たった一つの哲学の問いをめぐって統一的に議論が進められていく専門書を書くことと考えていたなら、本書のような構成にすることはできなかっただろう。入門書の体裁をとつた多面的な構成のおかげで、読者に対しては具体的な問題への取り組み方を複数例示するとともに、自分にとって関心のあるテーマの論文や短評を書く感覚で、いくつかの章や章の部分を仕上げることができた。

これも「はしがき」で書いたことだが、本書はまったくの初級入門書ではない。たとえば、何らかの哲学的な問題関心をもつ読者が、その問題に対して現代の形而上学者ならどのような接近法をとるのかを見るのにも、本書は使っていただけだと思う。初級の入門書にならなかったのには理由がある。その理由はまた、本書の刊行がこうも遅れてしまった理由の一つでもある。どういふことか以下で説明しよう。

十年ほど前に、私と青山拓央、谷川卓の三人で、当時まだまとまった形で紹介されていなかった分析哲学系の形而上学の翻訳論文集を編んだことがある（『現代形而上学論文集』）。そのとき勁草書房の土井美智子さんにお世話になった流れで、本書の企画はスタートした。土井さんからの発案と示唆を受けて、私のほうでもいくつかの可能性を、例によってゆっくりと考えているあいだに、状況の変化があった。分析的な形而上学の入門書と見なせる良書が続々と翻訳されはじめたのである（本書本文で言及しなかったものとして、E・コニーとT・サイダーの『形而上学レッスン』、小山虎訳、春秋社、二〇〇九年をあげておく）。しかもそれだけでなくこの分野が、現代哲学のサブジャンルとして、私が予想していたより早くわが国で認知され、ついにははじめから日本語で書かれた本格的な入門書までもが登場するにいたったのである（それが本書の冒頭でも触れた『ワードマップ現代形而上学』である）。この流れはおそらくいまも続いている。講談社から二〇一一年を皮切りに数年おきに刊行された八木沢敬の三冊の『分析哲学入門』は、今日の形而上学的な議論についても多くのことを教えてくれるものであった。後半の章の注においていそいで言及した倉田剛の新刊『現代存在論講義』も、まだ先に続きそうである。ということ、既刊の分

析形而上学の入門書の「次に読むべきもの」として、企画を一から組みなおすことで、本書はようやく刊行にこぎつけたわけである。(刊行が遅れたもう一つの理由は、お決まりの、より外的なものであり、知ったところで面白くないだろうから詳細に書かないで、よくするに体力と気力が低下しはじめたころ人生は忙しくなるという、例のあれである。)

八木沢の三冊本は、無印のものと「中級編」と「上級編」からなる。ひるがえって本書の場合、専門度は中級といったところだろうか。ただ、議論のこまかさの点で、本書は注において専門度を上昇させる傾向にあるが。いずれにしても、それなりの紙幅を使いある程度専門的な記述をする必要があったため、当初思い描いていたけれども書けなかったというテーマがいくつか存在している。「世界そのもの」はその一つであり、第一章のいくつかの注に、それについて書こうとしていた痕跡が残っている。「時間」や「可能世界」についてもあいかわらず書けなかった。ただし可能世界に関しては、形而上学的なトピックを含む充実した解説書がすでにあるのでそちらを参照してほしい(飯田隆の『言語哲学大全Ⅲ——意味と様相(下)』、勁草書房、一九九五年)。また、時間と可能世界の両方について独自の考察を展開した最近の著作として、青山拓央の『時間と自由意志——自由は存在するか』(筑摩書房、二〇一六年)をあげておく。ただし、青山の本はいつものとおり非常に「読ませる」文体で書かれているものの、入門書というのとはちょっと違う気がする。しかしお勧めである。

本書で論じられていないその他のトピックに「メタ形而上学」や「メタ存在論」がある。それらは近年流行の話題であり、すくなくとも流行している程度に応じては重要なだろう。とはいえ、本書で私

は、最も基礎的な立場や方法論の部分に関しては、オルタナティブ他の可能性との周知な比較やそれらに対抗するための擁護をすることなく、静かに、つまり自分の家に玄関マットを敷くような仕方、ただ気に入ったものを採用するにとどめた。メタ形而上学の話をしたくないのは、私がそれを十分にできるほど形而上学に詳しくないのと、それから、打ちあけると、その種の議論自体にあまり興味がないからである。(上層レベルで規範的なことを言ったり提言をしたりすることの意味がよく分からないというのもある。メタ形而上学について論じるとは、メタメタ形而上学を実践することである。)もちろん、誤解されないようにちに言っておけば、ここでそのように述べるからといって、私は誰かの研究プログラムを抑制したいなどとは思っていない。実祭まったく抑制されないだろう。というのも、哲学者は総じて「メタ」好きであり、放っておくとエレベーターでどんどん上階に行ってしまうような人ばかりだからである。同時に、「理由」や「根拠」を問うのが大好きな集団であり、やはり放っておくと、たとえばなぜ根拠を問うべきかの理由について議論を始めたりする人ばかりだからである。それゆえ、形而上学方法論や形而上学基礎論についていずれ、はっとするような面白い話が彼らの口から聞けるにちがいない。ただ、私自身はそうした上下運動より、どちらかといえば、黴のように表面に拡がっていく動きのほうが好きだと(小声で)言いたいのである。

三つ前の段落で説明したように本書は難産であった。最初の段階から企画に関わっていたいている  
野草書房の土井さんには感謝の言葉しかない。彼女の信じられない忍耐力と適切な誘導のおかげで、本書は実在する本になることができた。鈴木生郎、谷川卓、吉沢文武の三氏には本書の草稿を読んでもら



い、専門的な観点から重要なコメントをいただいた。体力と気力と知力に溢れる彼らは、つねに驚くべき速さで返信してくれた。本書の誤りは三氏のおかげで少なくなっているはずである。お礼を申しあげたい。あとはこの本が適切な読者のもとに届くことを祈るばかりである。

二〇一七年六月

本書を、考えることの楽しさを人生で最初に教えてくれた父に捧げる

柏端達也